

## 四国東部産青色片岩製片刃石斧の展開

### The stone adze made from blueschist in eastern SHIKOKU island, Japan

中村 豊

はじめに

弥生時代の大陸系磨製石器として、三波川帯変成岩製とみられるものが近畿地域に多くみられることは、1970年代ごろから指摘されてきた。当初の注目は磨製石庖丁（酒井 1974）で、原産地は紀ノ川流域とされていた。その後、柱状片刃石斧にも目がむけられ、四国東部産の可能性が指摘されるようになった（西口 2000）。さらに、筆者は徳島市眉山北麓の遺跡で、弥生中期後葉の青色（藍閃石）片岩製片刃石斧未製品を見出し、近畿方面へもたらされている可能性を指摘した（中村 2004）。これら柱状片刃石斧には緑色片岩製と青色（藍閃石）片岩<sup>(1)</sup>製の 2 種類がみられ、弥生前期に属するものは緑色片岩で、弥生中期に属する多くは青色片岩製であることがあきらかとなった（中村 2008・2010、中村編 2012、中村 2013）。さらに、青色片岩は四国東部地域において特徴的かつ多量に産出することや、青色片岩製の片刃石斧<sup>(2)</sup>は、ほぼ弥生中期中葉から弥生後期前葉にみられることがあきらかとなってきた。この青色片岩製片刃石斧の生産と展開を追究することは、弥生時代の交易、さらには社会の一端を復元する上で一定の寄与を期待できるものである。

以上のような背景のもと、2019年7月8日、青色片岩製片刃石斧が直線距離で約 270km はなれた、小松市八日市地方遺跡で出土していることを確認した（図 9、図 12 - 5、図 13 - 2、図 14 - 1）。本稿では、この青色片岩製片刃石斧の生産と展開を論じるなかで、日本海側という遠隔地への展開についても考察をくわえたい。

#### 1. 研究の背景

##### (1) 考古学からみた青色片岩製石器の研究

かつて、近畿地域に散見された縄文・弥生時代における結晶片岩製の石器は、紀ノ川流域産であると考えるのが通例であった。この見方は基本的に正しい<sup>(3)</sup>が、西口陽一氏（2000）は、近畿地域の弥生時代にみられる「緑色（黒色）片岩」製の柱状片刃石斧は、四国東部産である可能性を指摘した。すでに石鏃など打製石器の素材としての金山産サヌカイト（藁科・東村 1983 ほか）や、石棒の素材としての結晶片岩が四国方面（中村 1998、中村編 2001、中村 2005・2014 ほか）からもたらされていたことは指摘されつつあったが、これに大陸系磨製石器である柱状片刃石斧をくわえることで、あらたな視点と研究の流れを引き出す端緒を開いた。

一方、その柱状片刃石斧が四国東部産という根拠は、考古学的には吉野川中流域の遺跡に散見される未製品に拠っており、地質学的には観念的・経験論的な部分を残していた。石材につ

いても、「緑色（黒色）片岩」製として一括りにとらえられており、岩石学・地質学的知見からみた原産地推定を含めた課題は残されたのである。また、柱状片刃石斧の使用は弥生前期から弥生後期前葉までの長期にわたるため、時期による変化に検討の余地を残した。

## （2）地質学からみた青色片岩研究

三波川帯は、関東山地から九州にいたる全長約 800km にもわたる変成岩地帯である。よく似た変成岩が広域にわたって分布しており、地域的な特徴は捉えにくい。一方四国中部から東部では、別子銅山を控えて、銅鉱床としての可能性を秘めていたこともあって、地質学的研究が積み重ねられてきた。また、故岩崎正夫氏が徳島大学に着任した 1950 年代以降、高越・眉山地域の研究が進展した。岩崎氏は着任後すぐ眉山の地質学的調査に着手し、塩基性片岩に青と緑の 2 種類がみられ、前者が藍閃石片岩（青色片岩）であることを見出した。岩崎氏はこの時点で、高越・眉山地域は、三波川帯でも藍閃石片岩（青色片岩）をまとめて産出する特別な地域であると指摘している（岩崎 1955、岩崎ほか 1963、岩崎編 1979）。

2000 年代以降、三波川帯変成岩研究にも進展がみられた。別子、高越、眉山といった四国中部から東部地域では、低温高压の変成岩が特徴的に分布する地域として、地質学的研究が続けられてきた。なかでも高越・眉山地域に青色片岩が特徴的に分布していることは、岩崎氏以降も注意されていた。2016 年には、日本地質学会によって、各都道府県の岩石・鉱物・化石が指定されていったが、青色片岩は「徳島県の岩石」としての指定を受けた（青矢 2016）。青色片岩自体は各地に点々とみられるが、日本列島のなかでも特徴的にまとめて産出し、とくに研究が進められているのが、高越・眉山地域と目されているからにはほかならない。

近年では、青矢睦月氏らによって四国中部から東部地域における三波川変成作用の再検討がおこなわれ（青矢・遠藤 2017 ほか）、高越・眉山地域でまとまった量の青色片岩が産出する原因の解明につながりつつある。

## （3）青色片岩製片刃石斧研究の現状と課題

西口氏（2000）の研究によって近畿地域における「緑色（黒色）片岩」製柱状片刃石斧の原産地を四国東部とする見方が出現した。一方で、その使用時期は弥生前期から弥生後期前葉までの長期にわたるため、時期ごとのより詳細な検討が必要となった。また「緑色（黒色）片岩」製として一括りにとらえられた石材であるが、四国東部の地質学的特徴である高越・眉山地域にまとめて産出し、「徳島県の岩石（青矢 2016）」にも指定された青色片岩が、石材としてどのように活用されたのかを見極める課題は残されたのである。

筆者はこの課題をふまえて、弥生前期の片刃石斧は緑色片岩製、弥生中期中葉以降の片刃石斧は青色片岩製のものが多いことを見出した（中村 2004・2008・2010、中村編 2012、中村 2013）。その過程で、緑色片岩と青色片岩との違いは、肉眼観察だけではなく、比重測定をくわえることによって、より有意な区分が可能であることに気づいた。すなわち、緑色片岩は概ね比重 2.9 以下におさまるのに対し、青色片岩は 3.0 を越えるものが大半を占めることである。以上の成果を報告書（中村編 2012）にまとめたが、その後の資料増加と新知見に、考察と分析をくわえたものが、本稿の位置づけになる<sup>(4)</sup>。



図1 青色片岩製片刃石斧と緑色片岩製片刃石斧（徳島：1/3）

※図1はいずれも徳島大学埋蔵文化財調査室所蔵



図2 青色片岩製片刃石斧と緑色片岩製片刃石斧（香川：1/3）

※図2はいずれも香川県埋蔵文化財センター所蔵

## 2. 緑色片岩製片刃石斧と青色片岩製片刃石斧

### (1) 肉眼観察と型式学的検討

ここでは、資料の豊富な徳島と香川の遺跡に絞って、弥生前期から弥生後期前葉にかけての片刃石斧の特徴と変化を概観する。徳島市庄・蔵本遺跡（図1-4・5、図3-1～3・5・6）、同名東遺跡（図3-4）、さぬき市鴨部・川田遺跡（図2-1、図3-7）、観音寺市一の谷遺跡（図2-2、図3-8）、善通寺市龍川五条遺跡、丸亀市中ノ池遺跡などから出土した弥生前期から弥生中期前葉の柱状片刃石斧・扁平片刃石斧は、片理の発達ที่著しい特徴をもつ緑色片岩製である。一方、庄・蔵本遺跡（図1-1～3、図5-5～8）、徳島市南庄遺跡（図5-1～4、図7-1～4）、同矢野遺跡（図4-4）、徳島市安都真出土品（図4-3）、鳴門市大麻出土品（図4-1）、阿波市日吉谷遺跡（図5-9・10、図8-2・3）、同桜ノ岡遺跡（図8-4～7）、同赤坂Ⅲ遺跡（図8-1）、同北原遺跡（図4-2）、同前田遺跡（図4-5）、三好市大谷尻遺跡（図10-3）、東かがわ市成重遺跡、同池の奥遺跡（図2-3～5、図10-6～8）、善通寺市旧練兵場遺跡など、弥生中期中葉から弥生後期前葉にかけての遺跡から出土した柱状片刃石斧・扁平片刃石斧が青色片岩である。

両者には型式学的にも相違があつて、緑色片岩製の柱状片刃石斧は断面が円みをもった蒲鉾形（図3-1）または円みの強い楕円形（図3-5・8）で、後主面に抉りをもつ（図1-5、図2-2、図3-1・5・8）ものが多いのに対し、青色片岩製の柱状片刃石斧（図4・5ほか）は断面が長方形か隅丸方形で、後主面に抉りをもつものが少ないという特徴をもつ。ほかにも、前者には、柱状片刃石斧（図3-1・5・7・8）・小型方柱状片刃石斧（鑿状石斧、図3-6）・扁平片刃石斧（図3-2～4）のつくり分けが明確なのに対し、後者には小型の扁平片刃石斧やとくに小型方柱状片刃石斧が少ないこと、扁平片刃石斧は基本的に大型化し、厚みがあつて柱状片刃石斧に近い中間的な形状のもの（図5-8～10、図11-6、図12-3）や、薄手でやや大型の板状鉄斧を模したようなもの（図5-4・7、図11-8）がある。

### (2) 比重

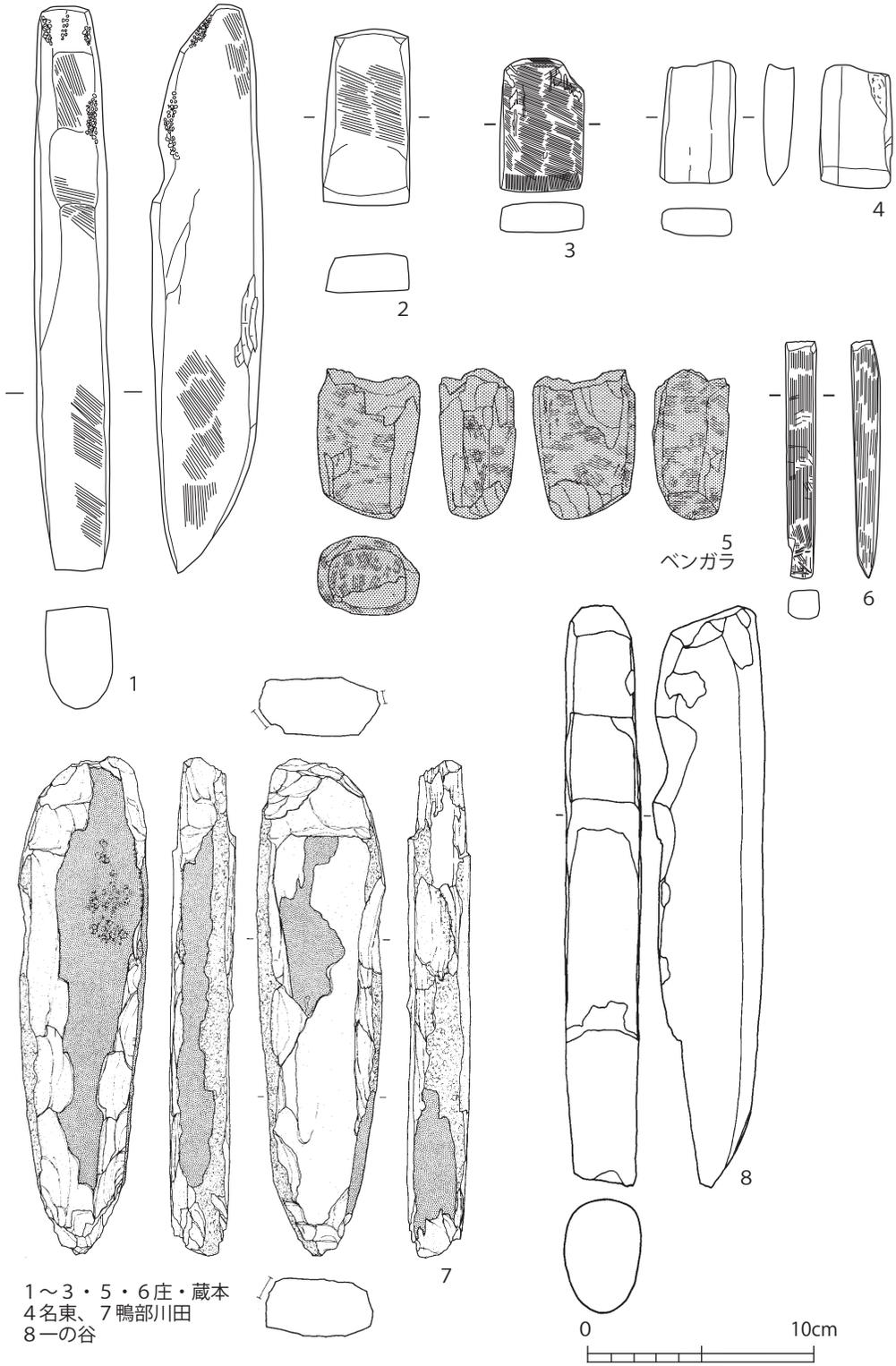
石器石材の同定に比重測定が有効であることは、楯真美子（1992 など）、柴田徹（2007 など）、佐藤由紀男（2017 など）三氏らの研究によってあきらかになりつつある。

この点は緑色片岩製片刃石斧と青色片岩製片刃石斧にも該当し、両者は比重に明確な違いがある（中村編 2012）。弥生前期・弥生中期前葉の緑色片岩製は比重 2.9 以内におさまるのに対して、弥生中期中葉以降の青色片岩製は比重 3.0 を超えることを基本としている。本稿では、あらたにこの成果をグラフ化し、視覚的により明確化するよう配慮している（図6）。

以上のような相違が生じた要因は、青色片岩が、緑色片岩より地下深くまで沈み込んだ痕跡を残しているからにほかならない。よく観察すると、アルバイト・スポットやガーネットといった、低温・高圧条件で形成される鉱物を含んでいることがある。

### (3) 弥生前期・弥生中期前葉と弥生中期後葉との間

弥生前期・弥生中期前葉の緑色片岩と弥生中期中葉以降の青色片岩との間には、見た目の色調（図1・2）や重量感（比重、図6）、硬さ、片理の発達度合いからくる質感の違い、石材の割れ方などから多産する場所（水系や岩体）にいたるまで、明確な違いが認められる。われ



1～3・5・6庄・蔵本  
4名東、7鴨部川田  
8一の谷

図3 弥生前期・弥生中期前葉の緑色片岩製片刃石斧

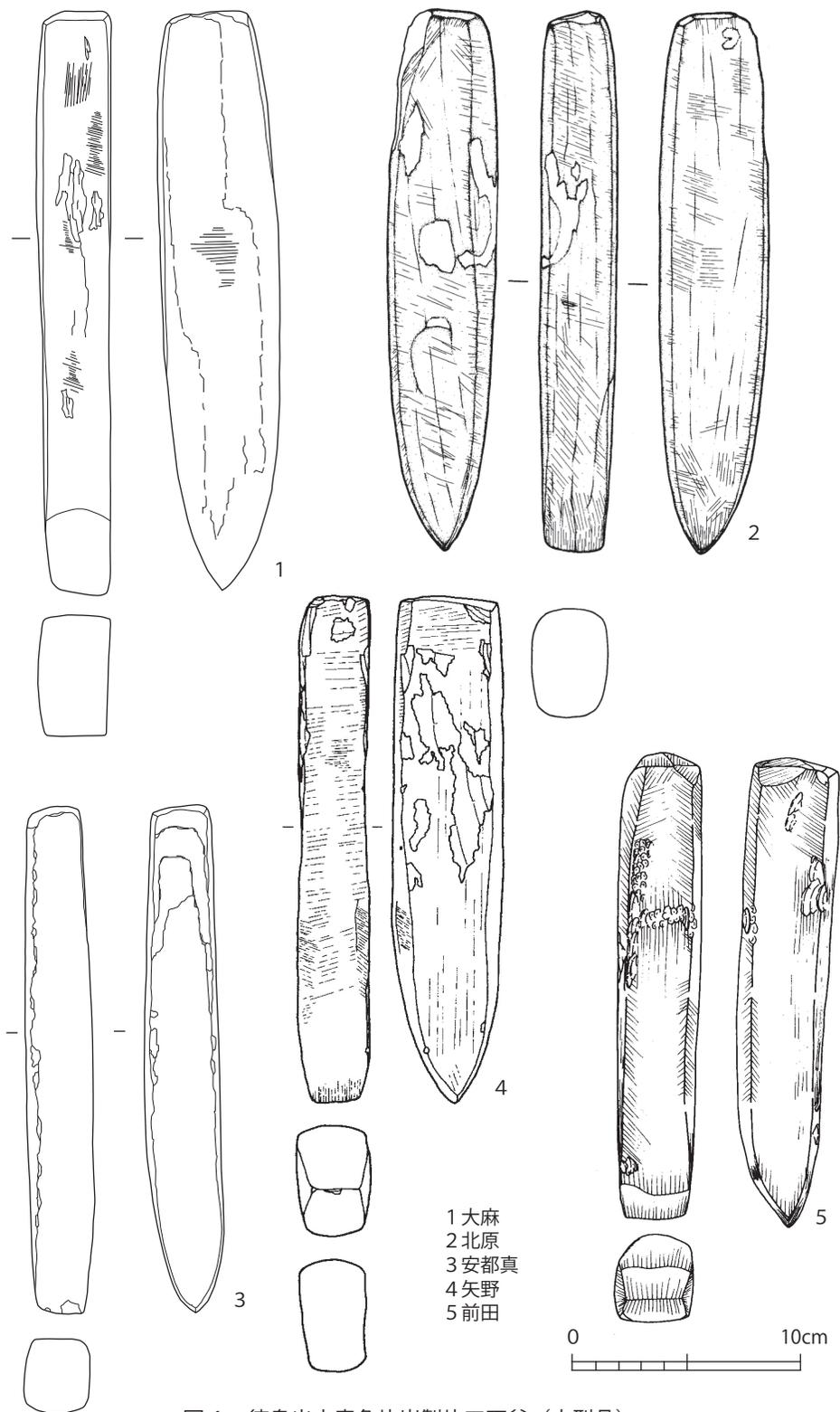


图4 德島出土青色片岩製片刃石斧（大型品）

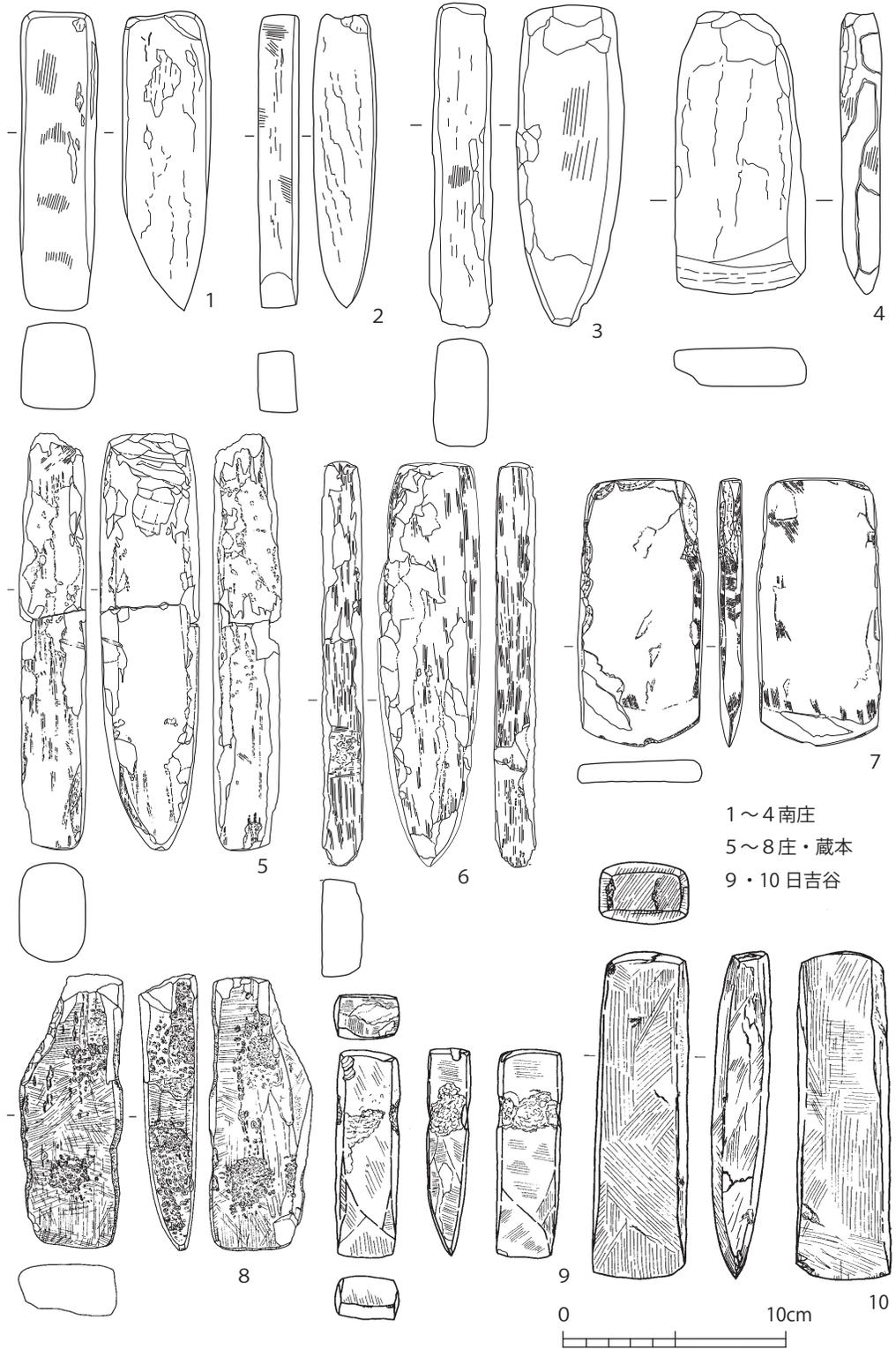


图5 徳島出土青色片岩製片刃石斧（中型品）

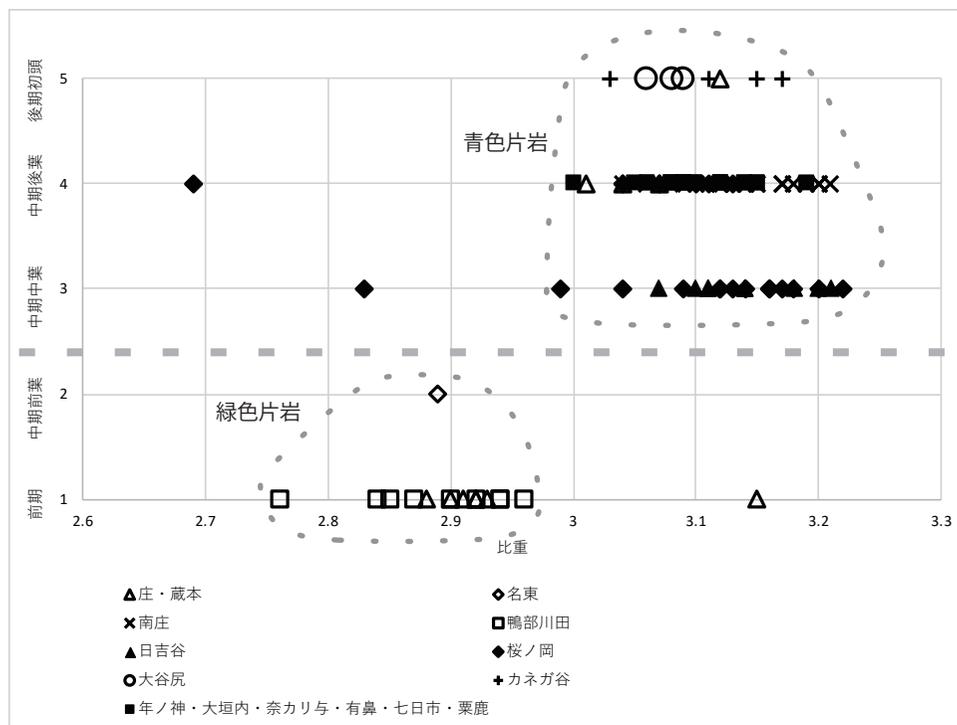


図6 時期による比重の変化

われはおなじ片岩のカテゴリーに分類しているが、当時の人々は全くことなる岩石であると認識していたとみるべきであろう。

あらためて図6をみるとあきらかではあるが、若干の例外をのぞいて、弥生前期・弥生中期前葉の緑色片岩製片刃石斧と弥生中期中葉の青色片岩製片刃石斧との間には比重に明確な差を認めることができる。さらに、先に述べたような型式学的変化をともなっている。この間に素材の獲得から生産、消費、交易にいたるまで大きな変化がみられたことになる。以下、この変化について、可能な限り考察をくわえていきたい。

### 3. 生産と消費・分布

#### (1) 原産地の推定

三波川帯結晶片岩の原産地推定は容易ではない。東西 800km 以上にもわたって類似した変成岩が分布している。考古学で石材の原産地推定法としてよく活用される、蛍光 X 線分析による全岩化学組成分析も、どれほど成果が期待できるのかは不透明である。とくに緑色片岩は素材を採集できる地点が随所に認められるため、原産地に迫るのは容易ではない。

一方青色片岩も、その産地が各地に点在する事実には変わりはない。しかし、日本地質学会の HP を参照すると「三波川変成岩類の中でも、まとまった産出が知られるのは徳島県の眉山－高越地域のみである（青矢 2016）」としている。すなわち、眉山・高越山は原産地として有力な候補地ということになる。近年地質学では、青色片岩など、低温高压条件を受けた変成岩

の成因について研究が進展しつつある（青矢・遠藤 2017 ほか）。今後は全岩化学組成以外の切り口からも、地質学との共同研究を進めていくべきであろう。また、眉山や高越山の詳細な地質図と未製品出土遺跡との比較なども進めていかねばならない。

## （2）緑色片岩製片刃石斧の生産と消費

弥生前期の緑色片岩製片刃石斧は、西部瀬戸内地域あたりから近畿地域に至るまでの瀬戸内海沿岸各地に点在している。

四国東部地域では、これまで確実な未製品は確認できていない<sup>(5)</sup>。一方、片岩の産出しない地域に位置する鴨部川田遺跡で未製品の出土が認められる（図3-7）。すなわち、現時点でどこかわからない片岩産出地付近の遺跡から、研磨する前段階の状態消費先へと運ばれていた可能性が高い。鴨部川田遺跡や庄・蔵本遺跡（図3-5）ではベンガラが付着がみとめられるので、加工斧としての実用品だけではなく、儀礼用の斧が含まれている点は、交易の内容を考える上で興味深い。

## （3）青色片岩製片刃石斧の生産と消費

緑色片岩製片刃石斧の展開は、弥生中期前葉をもって途絶えてしまう。原産地付近での生産と消費は引き続きおこなわれたと考えられるが、石斧を介した地域間の交流に大きな変化があったとみられるのである。

これにかわって、弥生中期中葉から青色片岩製片刃石斧の生産が開始される。現時点で確認できる確実な未製品は、四国東部地域に限られる。すなわち、南庄遺跡（図7-1~4）、庄・蔵本遺跡、前田遺跡、赤坂Ⅲ遺跡（図8-1）、日吉谷遺跡（図8-2・3）、桜ノ岡遺跡（図8-4~7）で確認している。このうち、南庄遺跡と庄・蔵本遺跡は吉野川下流の眉山北麓に位置する。一方前田遺跡、赤坂Ⅲ遺跡、日吉谷遺跡、桜ノ岡遺跡は、いずれも吉野川が中流から下流へ移行し、クサビ状の徳島平野の起点となる付近、吉野川北岸の河岸段丘上に位置する。すなわち、南庄遺跡と庄・蔵本遺跡は眉山周辺、その他は高越山に近いということになる。ただし、今のところ、吉野川南岸に位置する高越山山麓、すなわち川田川の形成する扇状地や河岸段丘で未製品出土遺跡はみつかっていない。

また、現時点では未製品出土数は十分ではなく、生産工程やその規模を十分復元するには足りない。工房と呼びうる遺構も未見である。

未製品を観察すると、図7-1のように断面方形で、露頭から直接採取したか、露頭から脱落してそれほど期間がたっていない素材のほか、図7-2~4のように、角の取れた礫状の素材の両方がみられるが、いずれも四角柱に近い形状のものを素材としている。剥離をあまりくわえずに、素材の形状を活かして粒状、または線状の敲打をくわえたのちに研磨を開始している。一方図8は、角柱状の素材を片理に沿って打撃をくわえて分割し、調整剥離・敲打・研磨をくわえているものが多い。両者に見違えがあるようにもみえるが、未製品自体まだ多いとはいえないので、眉山と高越山の違いとまでは断言できない。今のところ未製品はこの他の地域にはみられないので、四国東部地域で製品化または、完成に近い状態まで仕上げた上で、交易に供する場合が多かったものと推察される。

以上をふまえて、今かりに分布図を作成した（図9）。なお、図9は未完成であり、今後詳

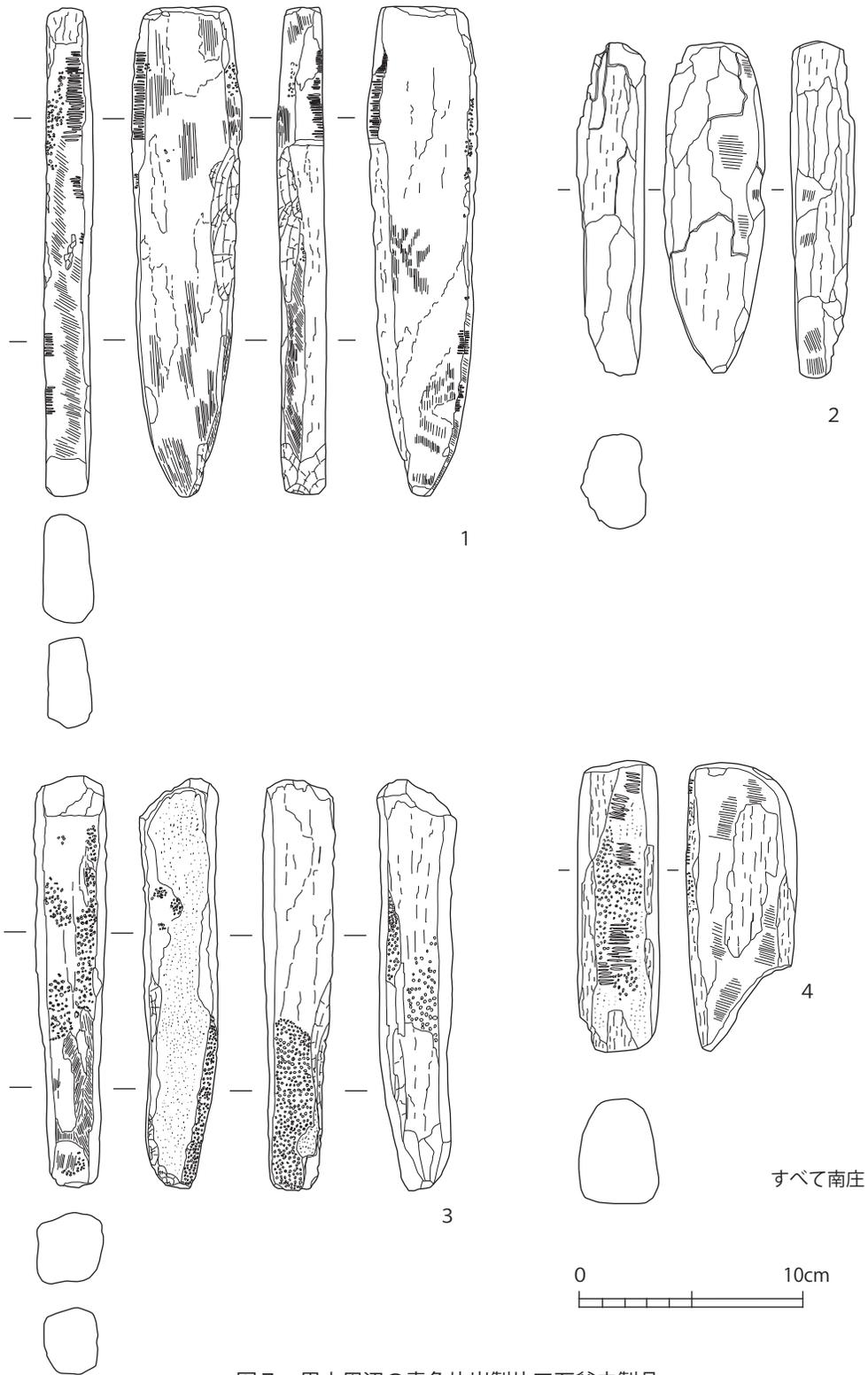


図7 眉山周辺の青色片岩製片刃石斧未製品



1 赤坂Ⅲ  
 2・3 日吉谷  
 4～7 桜ノ岡

図8 高越山周辺の青色片岩製片刃石斧未製品

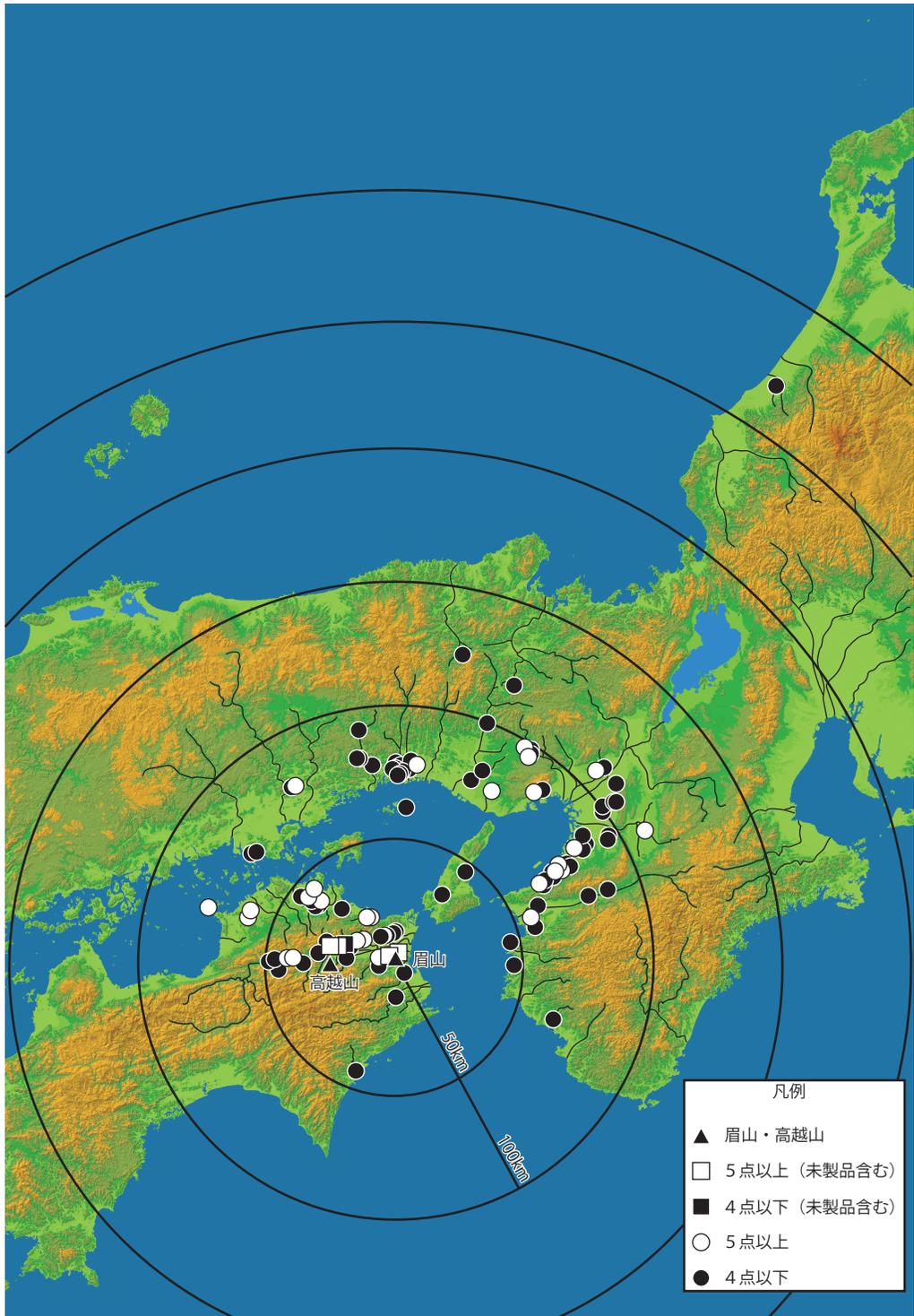


図9 四国東部産青色片岩製片刃石斧分布図

細に検討をくわえて増補・修正しなければならない。分布図を作成するに当たっては、とくに未製品と出土点数を識別できるよう、ドットの形状を変えている。現時点で以下の点などを指摘することが可能である。

- ①未製品は四国東部のみ出土する。
- ②一方、製品は四国東部を中心に、中部・東部瀬戸内沿岸、大阪湾沿岸、紀伊水道沿岸地域一帯に濃密に分布する。
- ③沿岸部の出土が圧倒的に多いが、大和川や紀ノ川、千種川、加古川、武庫川各水系など、内陸部でも出土する。
- ④時には円山川、由良川といった日本海側水系まで達している。
- ⑤現時点での最遠は、直線距離で約 270km はなれた小松市八日市地方遺跡である。
- ⑥ 5 点以上出土する遺跡もあれば、1～2 点の出土にとどまる遺跡もある。

#### 4. 青色片岩製片刃石斧の展開

##### (1) 四国東部出土の青色片岩製片刃石斧

原産地に近いと目される、徳島出土の青色片岩製片刃石斧の特徴としては、柱状片刃石斧に全長 20cm を凌駕する大型品が多いという点をあげることができる(図 4)。断面方形のもの(図 4-1・4)と隅丸方形のもの(図 4-2・3・5)とがある。いずれも扱いはみられない。1 は重量 1 kg を超えており。その他も 500g を超える。このような長大さと柄も含めた重量感を考慮しつつ、用途については慎重に検討をくわえるべきであろう。

図 5-1～3、5・6 のように、長さ 15～20cm 程度の標準的なサイズのものは多数認めることができる。1 部の例外(図 7-2)をのぞいて扱りのない個体が多い。扁平片刃石斧は図 5-4・7 のように、大型化がみとめられる。図 5-8～10 のように、柱状片刃石斧と扁平片刃石斧との中間的な形態のものも目立っている。

庄・蔵本遺跡(図 10-1)、カネガ谷遺跡(図 10-2・4・5)、大谷尻遺跡(図 10-3)のように、後期前葉の遺跡でもみられるのは他地域にない特徴であるといえる。

香川では徳島の遺跡と遜色ないほど多くの青色片岩製片刃石斧が出土する。なかでも、池の奥遺跡(図 2-3～5、図 10-6～8)、成重遺跡、旧練兵場遺跡など多量に出土する遺跡が特徴的である。

##### (2) 四国東部から日本海側への展開

加古川(瀬戸内海)から由良川(日本海側)を抜けるルートが、弥生時代における重要な交通路であったことは、銅剣形石剣の伝播ルートとして、早くに佐原真氏(1970)が指摘するところである。この地域は、標高わずか 95m の平地、丹波市氷上町石生の通称「水わかれ」に中央分水界が位置し、その後も「氷上回廊」として注目され(種定 1989、春日町・兵庫県 2000)、銅剣形石剣、銅鐸、金山産サヌカイトなどを題材に、瀬戸内海沿岸地域と日本海側地域との交流についての議論が重ねられてきた。本稿では、これに青色片岩製片刃石斧をくわえることができたと考えている。

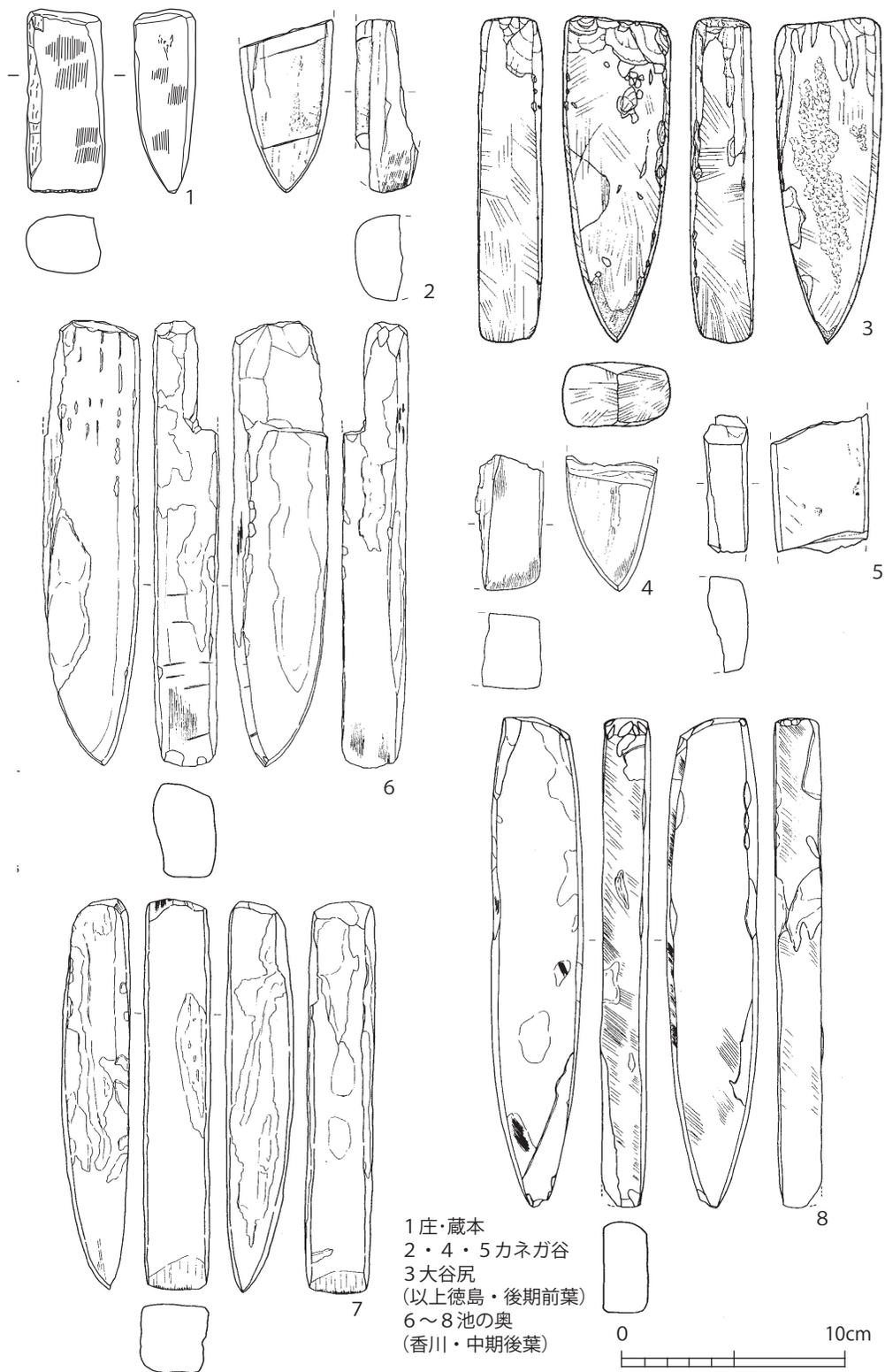


図10 香川・徳島出土青色片岩製片刃石斧

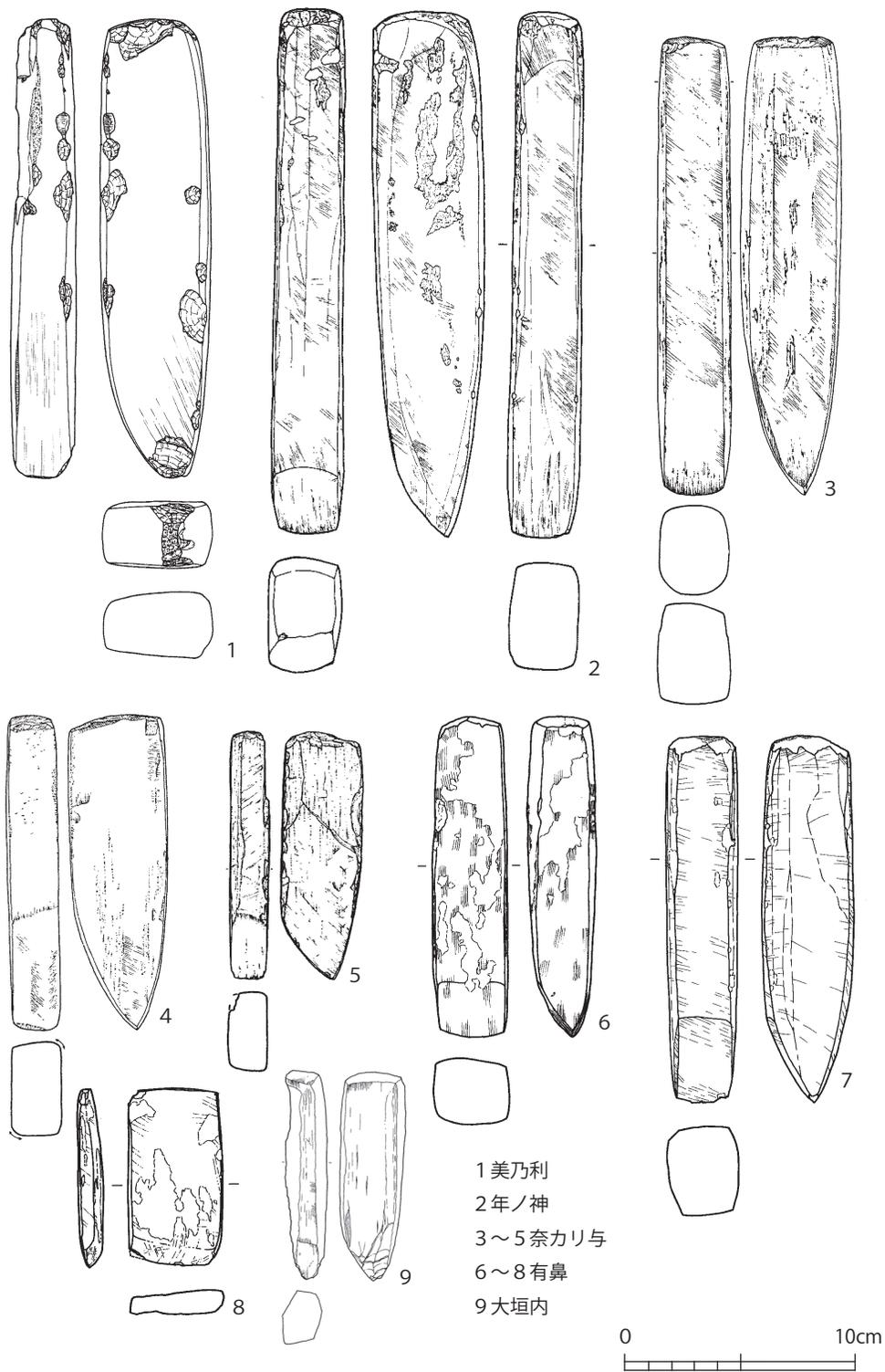
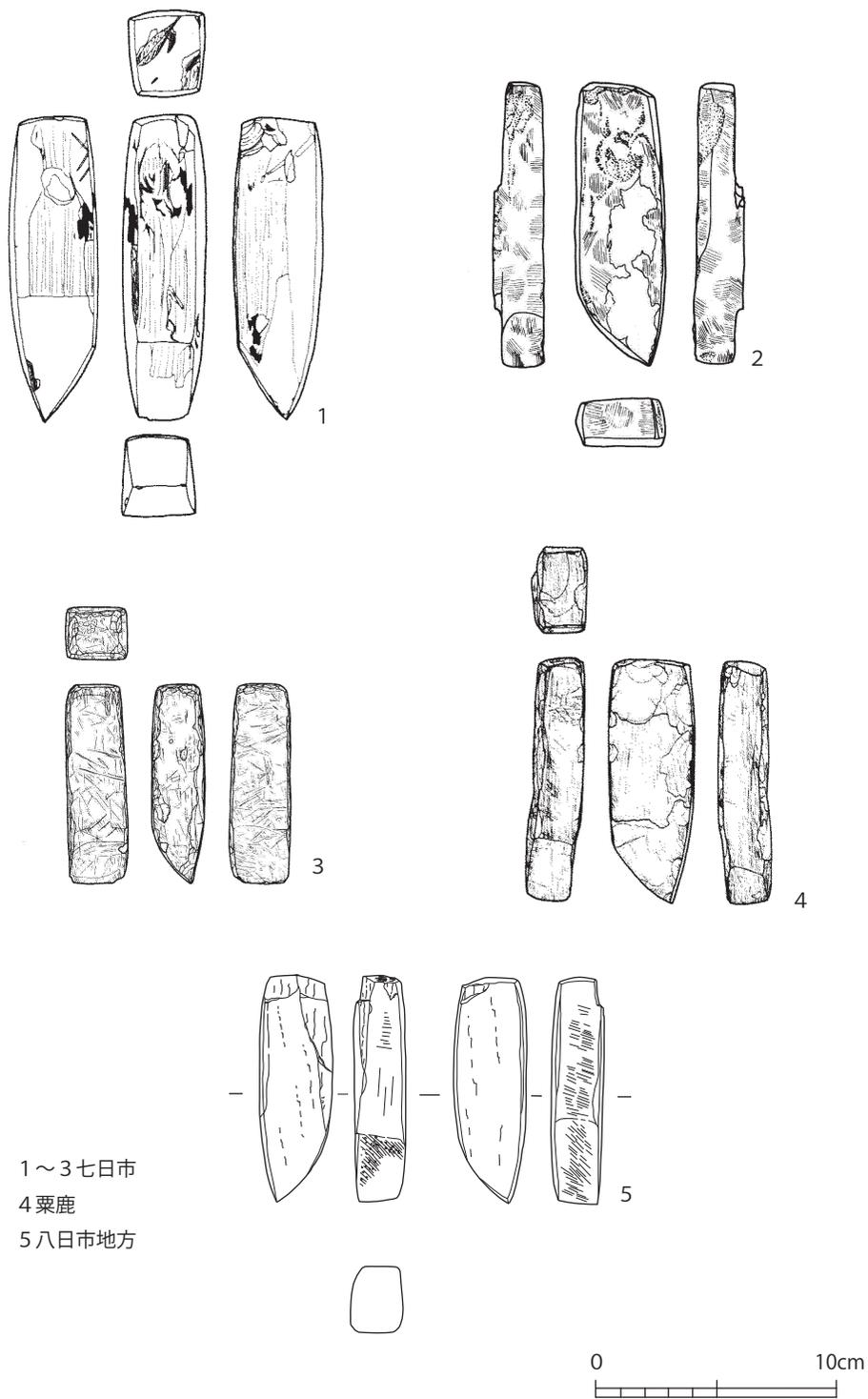


图 11 加古川・武庫川水系出土青色片岩製片刃石斧



1~3 七日市  
 4 粟鹿  
 5 八日市地方

图 12 日本海側水系出土青色片岩製片刃石斧



図 13 青色片岩製片刃石斧（1・3・4庄・蔵本遺跡、2八日市地方遺跡）  
 ※庄・蔵本遺跡は徳島大学埋蔵文化財調査室所蔵、八日市地方遺跡は小松市教育委員会所蔵



図 14 青色片岩製片刃石斧（1八日市地方遺跡、2庄・蔵本遺跡）  
 ※庄・蔵本遺跡は徳島大学埋蔵文化財調査室所蔵、八日市地方遺跡は小松市教育委員会所蔵

図9を参照すると、四国東部産青色片岩製片刃石斧は、東部瀬戸内海・大阪湾・紀伊水道沿岸各地域に濃密に分布していることがわかる。そうしたなかで、いくつかの水系を通じて内陸部にも、もち運ばれていることがみてとれる。瀬戸内海沿岸地域と日本海側水系との交流を考える上でとくに重要な位置をしめるのは、いうまでもなく加古川・武庫川水系出土資料である。

加古川水系では、加古川市美乃利遺跡(図11-1)、三木市年ノ神遺跡(図11-2)、西脇市大垣内遺跡(図11-9)などでの出土が認められる。なかでも美乃利遺跡、年ノ神遺跡出土品は、全長20cmを超える大型品である。

武庫川水系では三田盆地での出土が目立っており、三田市奈カリ与遺跡(図11-3~5)、同有鼻遺跡(図11-6~8)、同平方遺跡、同中西山遺跡などで出土している。とくに奈カリ与遺跡では全長20cmを超える大型品(図11-3)を含む8点、有鼻遺跡でも9点が出土し、この地域に多量の青色片岩製片刃石斧が集積されていることがわかる。

加古川水系や三田盆地に集積された青色片岩製片刃石斧は、さらに「氷上回廊(佐原1970、種定1989、春日町・兵庫県2000)」を通じて、日本海側水系である由良川や円山川流域へと運ばれた。

由良川水系の丹波市七日市遺跡(図12-1~3)で3点、円山川水系の朝来市粟鹿遺跡(図12-4)で1点の青色片岩製片刃石斧を確認している。いずれも全長10cm前後の小型品で、さすがに大型品はみられない。

八日市地方遺跡出土品(図12-5、図13-2、図14-1)は、全長9.5cm、幅2.2cm、厚さ2.8cmをはかる。断面隅丸方形で、後主面に抉りをもたない。七日市遺跡や粟鹿遺跡出土品に類似した形態・大きさをもっているといえる。色調や重量感、石質など、いずれもこれまでみてきた青色片岩製片刃石斧と共通している(図13・14)。

由良川・円山川各下流域からの出土例は、今のところ確認していないが、舞鶴湾や城崎周辺から、海路天然の良港に位置し「交易港」的な側面をも有する八日市地方遺跡へともたらされたものと推察しておきたい。

## 5. まとめと課題

冒頭に記したように、2019年7月8日、四国東部産と目される青色片岩製片刃石斧が直線距離で約270kmはなれた、小松市八日市地方遺跡で出土していることを確認した(図9、図12-5、図13-2、図14-1)。これを受けたものが本稿ということになる。

これまでにも、弥生時代の近畿地域に分布する「緑色(黒色)片岩製柱状片刃石斧」は徳島産であるという可能性は指摘されてきた(西口2000)が、時期による変化や、「緑色(黒色)片岩」の、より細かい区分、原産地についてさらに踏み込んだ検討は、課題として残されてきた。

本稿ではこれをふまえて、弥生前期から弥生中期前葉の片刃石斧は緑色片岩製で、弥生中期中葉以降の片刃石斧が青色片岩製である点(中村2008・2010、中村編2012、中村2013)を、今回あらたに比重のグラフ化(図6)を通して、より明確化することに成功した。また、未製品の分布と観察によって、原産地についても考察をくわえた。

さらに製品の分布から、東部瀬戸内海沿岸地域から加古川・武庫川水系へともたらされ、い

わゆる「氷上回廊（佐原 1970、種定 1989、春日町・兵庫県 2000）」を通じて由良川・円山川といった日本海側の水系へもち運ばれ、舞鶴湾や城崎付近から、海路天然の良港である小松方面へと運ばれていった可能性を考察した。

一方で多くの課題が残された。とくに図 9 は今後も資料集成を継続し、肉眼観察や比重計測など資料の検証を十分におこなって増補・修正していかねばならない。

地質学の分野では、青色片岩が「徳島県の石（青矢 2016）」に指定されるなど、眉山・高越山地域に集中的に産出する要因解明へむけての研究が、進展しつつある。今後は地質学との共同研究を企画して、四国東部を原産地とする、より客観的な証拠を蓄積していきたい。これはすなわち、全岩化学組成分析からは難しいとされてきた三波川変成岩製の石器原産地推定研究に、あらたな展開をもたらす契機となるかもしれない。その過程で、大方の関心事でもあると考えられる、紀伊半島の様相についても考古・地質の両面から精査する必要がある。

本稿では、八日市地方遺跡での青色片岩製片刃石斧の確認から、東部瀬戸内海沿岸地域から日本海側へ抜けるルートに重きをおいて考察をくわえてきた。今後は、その他の地域における分布と消費のもつ意味についても検討していきたい。

## 謝辞

本稿執筆にあたってご協力いただいた、下記の方々に感謝申し上げます。

青矢睦月、近藤 玲、下濱貴子、菅榮太郎、中 勇樹、乗松真也、端野晋平、平井典子、三阪一徳、宮城一木、山岡邦章、小松市埋蔵文化財センター

## 註

- (1) 「青色片岩（せいしょくへんがん）」について、筆者はかつて、「藍閃石片岩」、「藍閃石—塩基性片岩」などの名称をもちいてきた。しかし、近年地質学界では「青色片岩」を学術用語としてもちいることが定着してきている。青矢睦月氏のご教示によると、「青色片岩」と「藍閃石片岩」は基本的に同じものを指している。しかし、厳密には青色の角閃石＝藍閃石ではなく、いくつかのものがみられる。また、藍閃石片岩は、古くから「変成相」の名前としても、もちいられており、藍閃石片岩相には鉱物学的な藍閃石ではない青色の角閃石もふくまれていることもわかってきた。その結果、より無難な名称の「青色片岩」が定着しているという。本稿でもこれにしたがって「青色片岩」をもちいる。

本稿ではさらに、弥生前期・中期前葉の片刃石斧の素材に「緑色片岩」の用語をもちいる。これも緑色の鉱物には多くのものがみられ、青色片岩製片刃石斧との比較をわかりやすくするためである。これまで混乱をきたしてしまったことを、自省したい。

- (2) 弥生中期中葉以降に四国東部から東部瀬戸内海沿岸を含む広い範囲（図 9）に分布する青色片岩製加工斧の大半は柱状片刃石斧である。しかし、扁平片刃石斧（図 5-4・7、図 11-8）や両者の中間的な形態（図 5-8～10、図 10-1、図 11-6、図 12-3）のものも確実にみられるので、本稿では「片刃石斧」としている。
- (3) 本稿では、弥生中期中葉ごろの近畿地域南部にみられる緑色片岩製磨製石庖丁の原産地については深入りしない。同時代の四国東部では、珪質片岩や紅簾片岩製の打製石庖丁が主流である。弥生前期には緑色片岩製磨製石庖丁もみられたが、青色片岩製が一定量含まれている。すなわち青色片岩多産地である四国東部で磨製石庖丁のまとまった生産をおこなうと、必然的に一定量の青色片岩製を混じえることになる。

- 筆者の調査によると、和泉市・泉大津市池上曾根遺跡出土の片岩製石庖丁に青色片岩製は含まれていないので、弥生中期後葉ごろの近畿地域南部にみられる緑色片岩製磨製石庖丁を紀伊半島産と想定するのは妥当といえるのである。
- (4) 筆者が四国東部産青色片岩製片刃石斧について言及した(中村 2004)後、以下の文献などでもとりあげられている。  
上田 2011、菅 2011、寺前 2006、禰宜田 2019、若林 2011、渡辺 2006。
- (5) 筆者はかつて、弥生前期から弥生中期前葉の緑色片岩製片刃石斧も、四国東部産の広域展開がみられたと考えたことがある(中村 1998)。その後の検討により、四国東部では地域内での小規模な生産にとどまるとみている。

#### 参考文献

- 青矢睦月 2016「徳島県の岩石 青色片岩」<http://www.geosociety.jp/name/content0146.html>
- 青矢睦月・遠藤俊祐 2017「初期三波川変成作用の認識、及び後期白亜紀三波川沈み込み帯の描像」『地質学雑誌』第 123 巻第 9 号 P677 - 698
- 井守徳男編 1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅱ』兵庫県文化財調査報告 16
- 岩崎正夫 1955「徳島市眉山の藍閃片岩類(第 1 報)」『徳島大学学芸紀要(自然科学)』第 6 巻 P27 - 45
- 岩崎正夫ほか 1963「徳島市周辺藍閃片岩地域の地質と岩石(徳島市眉山の藍閃片岩類 第 2 報)」『徳島大学学芸紀要(自然科学)』第 13 巻 P21 - 35
- 岩崎正夫編 1979『徳島の自然 地質 1』徳島市民双書 13 徳島市中央公民館
- 上田健太郎 2011「播磨の弥生時代石器」『石器からみた弥生時代の播磨』第 11 回播磨考古学研究会実行委員会 P11 - 34
- 春日町歴史民俗資料館・兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所編 2000『七日市遺跡と「氷上回廊」』真陽社
- 岸本一宏ほか 2007『粟鹿遺跡』兵庫県文化財調査報告 323
- 小泉信司編 1994『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 5 日吉谷遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 5
- 近藤 玲編 2005『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 28 大谷尻遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 53
- 近藤 玲・谷川真基編 2006『矢野遺跡(Ⅲ)(弥生・古代篇)』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 63
- 酒井龍一 1974「石庖丁の生産と消費をめぐる二つのモデル」『考古学研究』第 21 巻第 2 号 P23 - 36
- 佐藤由紀男 2017「石材の比重からみた弥生系磨製石斧の生産・流通」『岩手大学文化論叢』9 P83 - 93
- 佐原 真 1970「大和川と淀川」『古代の日本 5 近畿』角川書店 P24 - 43
- 柴田 徹 2007「岩種同定における比重測定の有効性について—千葉県松戸市野見塚遺跡・彦八山遺跡出土石材の再検討から—」『貝塚』第 62 号 P19 - 27
- 菅榮太郎 2011「大阪湾岸地域における弥生時代の石器生産と流通」『石器からみた弥生時代の播磨』第 11 回播磨考古学研究会実行委員会 P53 - 88
- 瀧山雄一 1989『南庄遺跡』徳島市教育委員会
- 桶真美子 1992「朝日遺跡にみられる磨製石斧の石質とその産地」『朝日遺跡Ⅱ(自然科学編)』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 31 P279 - 298
- 谷 匡人編 1988『土成町北原遺跡』徳島県教育委員会
- 種定淳介 1989「加古川と由良川—モノの移動について—」『横山浩一先生退官記念論文集Ⅰ 生産と流通の考古学』P395

- 種定淳介編 1990『七日市遺跡Ⅰ』兵庫県文化財調査報告 72-2
- 辻 佳伸編 1993『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告2 前田遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書2
- 寺前直人 2006「近畿地方における磨製石斧様式と金属製利器普及の特質」『石器から鉄器への移行期における社会の変革を考える』近畿弥生の会 P60-68
- 長濱誠司編 1999『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅳ』兵庫県文化財調査報告 185
- 長濱誠司編 2002『年ノ神遺跡』兵庫県文化財調査報告 235
- 長濱誠司編 2004『七日市遺跡Ⅲ』兵庫県文化財調査報告 271
- 中村 豊 1998「縄文から弥生へー吉野川下流域を中心にー」『川と人間ー吉野川流域史ー』溪水社 P79-100
- 中村 豊編 2001『縄文・弥生移行期の石製呪術具3』文部省科学研究費報告書
- 中村 豊 2004「徳島の弥生「低地」集落ー吉野川下流域を中心にー」『弥生社会の群像ー高地性集落の実態ー』古代学協会四国支部 P21-39
- 中村 豊 2005「列島西部における石棒の終末」『縄文時代』第16号 P95-110
- 中村 豊編 2005『庄(庄・蔵本)遺跡ー徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書ー』徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室
- 中村 豊 2008「四国東部地域における片岩製石器生産の展開」『吾々の考古学』和田晴吾先生遷暦記念論集刊行会 P77-93
- 中村 豊 2010「各地における生産と流通 東部瀬戸内」『季刊考古学』第111号 雄山閣 P68-72
- 中村 豊編 2010『庄(庄・蔵本)遺跡ー徳島大学蔵本団地体育館器具庫・医学部臨床講義棟建設に伴う発掘調査報告書、体育館建設に伴う発掘調査報告書補遺ー』徳島県教育委員会・徳島大学埋蔵文化財調査室
- 中村 豊編 2012『弥生時代における結晶片岩製石器生産・流通史の復原に関する研究』文部科学省科学研究費報告書
- 中村 豊 2013「弥生時代における四国東部産藍閃石ー塩基性片岩製柱状片刃石斧とその展開」『立命館大学考古学論集Ⅵ』立命館大学考古学論集刊行会 P147-158
- 中村 豊 2014「中四国地域における縄文時代精神文化についてー大型石棒・刀剣形石製品を中心にー」『島根県古代文化センター研究論集』13 P23-42
- 西岡達哉編 1990『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告7 一の谷遺跡群』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 西岡達哉編 2003『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告46 池の奥遺跡・金毘羅山遺跡Ⅱ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 西口陽一 2000「緑色(黒色)片岩製柱状片刃石斧」『あまのともしびー原口正三先生古稀記念集ー』P37-52
- 禰宜田佳男 2019「加賀および能登地域への弥生文化の道」『北陸の弥生世界 わざとこころ』大阪府立弥生文化博物館 P88-95
- 端野晋平・三阪一徳・脇山佳奈・山口雄治 2015「庄・蔵本遺跡第27次調査(立体駐車場地点)の成果」『紀要』第1号 国立大学法人徳島大学埋蔵文化財調査室 P43-97
- 原 芳伸 1993「赤坂遺跡(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)」『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告1』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書1 P7-96

- 原 芳伸編 2005「カネガ谷遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 62 P471 - 798
- 福海貴子・橋本正博・宮田 明編 2003『八日市地方遺跡 I』小松市教育委員会
- 松永住美編 1989『名東遺跡（天神地区）』徳島県教育委員会
- 村川義典 1984『春日七日市遺跡—確認調査報告書—』春日七日市遺跡発掘調査団
- 森下友子編 2002『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 10 鴨部・川田遺跡Ⅲ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
- 山下史朗編 1991『大垣内遺跡』兵庫県文化財調査報告 98
- 山田清朝編 1997『美乃利遺跡』兵庫県文化財調査報告 165
- 湯浅利彦編 1994『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 3 椋ノ岡遺跡（Ⅰ）・椋ノ岡遺跡（Ⅲ）』徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 3
- 若林幸子 2011「近畿における弥生時代の石器流通—河内平野の事例を中心に—」『石材の流通とその背景—弥生～古墳時代を中心に—』埋蔵文化財研究会 P 1 - 14
- 渡辺今日子 2006「石器の衰退と消滅」『石器から鉄器への移行期における社会の変革を考える』近畿弥生の会 P54 - 59
- 薬科哲男・東村武信 1983「石器石材の産地分析」『考古学と自然科学』第 16 号 P59 - 89

#### 挿図出典

- 図 1・図 2：筆者撮影、図 1 はいずれも徳島大学埋蔵文化財調査室所蔵、図 2 はいずれも香川県埋蔵文化財センター所蔵
- 図 3：1～3・6 筆者実測、4 松永編 1989、5 中村編 2010、7 森下編 2002、8 西岡編 1990
- 図 4：1・3 筆者実測、2 谷編 1988、4 近藤・谷川編 2006、5 辻編 1993
- 図 5：1～4 筆者実測、5～7 端野ほか 2015、8 中村編 2005、9・10 小泉編 1994
- 図 6：筆者作成
- 図 7：筆者実測
- 図 8：1 原 1993、2・3 小泉編 1994、4～7 湯浅編 1994
- 図 9：筆者作成
- 図 10：1 筆者実測、2・4・5 原編 2005、3 近藤編 2005、6～8 西岡編 2003
- 図 11：1 山田編 1997、2 長濱編 2002、3～5 井守編 1983、6～8 長濱編 1999、9 山下編 1991
- 図 12：1 村川 1984、2 種定編 1990、3 長濱編 2004、4 岸本ほか 2007、5 福海・橋本・宮田編 2003
- 図 13・14：筆者撮影、庄・蔵本遺跡は徳島大学埋蔵文化財調査室所蔵、八日市地方遺跡は小松市教育委員会所蔵